
ブラック*ガーデン

紫乃 華陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラック*ガーデン

【Zコード】

N7119X

【作者名】

紫乃 華陽

【あらすじ】

いつもと同じ、

いつも通り、

極普通の高校生活・・・

「うーん、どうだ？」

目が覚めたら知らない所にいるし・・・

「我ら秘密組織・・・」

何言つてんだよ?

人気女優にいつも通りの平凡な毎日を奪われるなんて思いもしなかつた。

これから繰り出されるのは、

なんともあ滑稽な、変な秘密組織との悲惨な日常。

それに耐えられるかは俺の気力次第である。

いつも通り（前書き）

ギャグを入れたつもりですが、ギャグセンスは全く無いです。男ばかりが登場してきます。恋愛の表現も少々あります。あまり好みではないという方はご退場願います。

いつも通り

「ふああ・・・。」

窓の外を見て欠伸を一つ。

田の前の答業用紙は裏返しにしてある。

そう、今は退屈で眠いテストの時間なのだ。

学年で五位という結構上位を誇る桜野優喜さくやの ゆうきにとって、テストとは暇つぶしの他向でもなかつた。

授業中の70%は覚えていたため点数はかなり良い。

キーンコーンカーンコーン・・・・

チャイムと同時にテストが回収された。

「んー・・・。」

大きく伸びをする。

周囲から「どうだった?」「五番の問題をーーーーーなどと聞こえてくる。

やはり人と自分を比べたがる者は多い。

「だらない。

優喜は溜め息をつく。

「どうしたー? 優等生。」

からかうようにせつてきたのは

クラスメイト兼親友の成田大介なりただいすけだつた。

彼とは小一からの幼馴染で離れようとしても離れられない存在だった。

つまりは腐れ縁だ。

「いや、退屈だなーと思つて。飯買いいに行こりや。」

「おー。今日ここそは焼きそばパン食くうぞ・・・。」

と毎日言いながら一度も焼きそばパンを手に入れる事すら出来ていないのだ。

大介の学習能力の無さには呆れて物も言えないが、これでも優喜より優秀だ。

一応優喜もその部分は憧れている。

「ただ・・・何か少し惜しいんだよな・・・。」

「ん? 何が?」

「・・・何でもない。」

思つていた事を悟られないように誤魔化した。

たまにとても勘が鋭い時があるため、友人達は彼の前では変な事を考えないように気をつけている。

「あーちくしょー・・・今日も売り切れてやがる・・・。何で焼きそばパンはこんなに人気が高いんだよー!」
と一人で怒つている。

優喜は苦笑し、ジャム＆マーガリン付きのコッペパンを手に取つた。
「それ美味しいの?」
「食つたことねーの?結構美味いよ。おばちゃん、これください。」
「あいよ120円ね。毎度ありがとうね。」
と営業スマイル。
「・・・ふうん。おばあちゃん、俺もこれ。」

「あいよー。ありがとうね。焼きそばパンはまた挑戦しにおりで。」

あつはつはつと明るく笑うおばあちゃんに大介は苦笑とピースを贈る。

それにも優喜は少し驚いていた。

身近に感じても実は遠いというのもある。

同じ庶民派の食いもんなのに・・・。

とか思つてしまつた。

「何か面白いことねーかなあー・・・。」

とコツペパンを頬張りながら大介は呟いた。

「面白い事な・・・。」

屋上に吹いてくるそよ風が一人の髪を撫でる。
ほぼいつも通りの変わらない毎日にも少し変化が欲しい、
と思わないはずも無かつた。

「ワンセグでも見るか」

大介はケータイのワンセグを開き「笑つていいかも!!」という番組のチャンネルをつけた。

「おーアンジューちゃん出でんじやん!!」

「アンジュー?あの最近はやりのモデルか?」

「おう。可愛いよなアンジューちゃん。男に大人気らしい。」

「そりゃ そうだろうな。」

ケータイを覗き込むと茶髪で顔がとても整っている女性が最初に目に入った。

「へえ・・・あんま見たことねえけど、やっぱモデルって人並み外れた顔してんのな。」

「・・・それ褒めてんの?」

「ん?ああ、一応。」

大介は優喜を一瞬睨んだが、

すぐにケータイの画面の方に視線を戻した。

『それではまた今度お会いしましょう。』

エンディングが流れて終わってしまった。

「あーーほら、お前のせいで終わっちゃったじゃねえかよー。」

優喜の胸倉を掴み、

今度は本気で睨んだ。

「し、知らねえよ・・・。大体残り五分くらいで終わる予定だった
し・・・。」

キーンコーンカーンコーン・・・

「ナイス！！」この時昼休み終了のチャイムが優喜には救世主に思
えたのだった。

「はあー・・・疲れた。少し部屋にでも寄つてくれかな・・・。」

十字路を曲がった途端、
どんつと人にぶつかるようなおどがした。
状況がよく読み取れず、

優喜はそのまま尻餅をついてしまった。

聞こえたのは誰かの足音。

病院の中こことるかのよひと思ひせぬつとひ消毒薬のこお。

体を動かそうとしても何故か動かすことが出来ない。

「ううだ？・・・うう。俺はどんな状況にいるんだ？」

優喜は重い皿蓋をゆっくりと開いた。

「お皿覚めかな？」

皿の前に座るのはアンジューに似た茶髪の男だった。

男は満面の笑みで優喜の顔を覗いた。

「ううはは？・・・うか、誰ですか？」

警戒してこる皿で皿の前の男を睨む。

「えー・・・やつれまで皿の皿の前こった女だよ。」

女？・・・・・アンジュ？

どういう事だ？

「混乱しているようだね。俺があの人気モテル、アンジュだよ。」

・・・・え？・・・は？

理解は早かつたが、その事実を受け入れるのに数分かかった。

「つまり、貴方とアンジュさんは同一人物、という事なんですね？」

男は「クリと頷いた。

「飲み込みが早いね。因みに俺の本名は富本 穂。こっちが本当の俺。」

相変わらず笑みを絶やさない彼に優喜は少し苛立ちを覚えた。

人を縛つておいて何々だこの男は。

再び睨む。

「桜野優喜君・・・だよね？」

「・・・・・何で俺の名前・・・。」

名前を教えたつもりは無いのに当てられてしまつた事に驚きを隠せ

ない。

穂はあるファイルを優喜の前に出した。
優喜はそのファイルをじっと見た。

そしてあまりの恐ろしさに絶句した。

「……れは……」

背中に流れる汗は冷たかった。

そのファイルに記されていたのは、
優喜の個人情報。
顔写真をも記載されていた。

「どうでそんな物……。」

「それは企業秘密 とまあ、君に協力して欲しいことがあるんだよ
ね。」

穂がパチンと指を鳴らすと部屋が明るくなつた。
だが、まだ部屋が暗く思えたのは、
優喜と穂の周りを囲つてるS.Pのせいだった。

「やつぱ君達居ると暗いね。」

「申し訳ありません、穂様。」

無表情で謝るS.P達。

声も揃つていて凄いというより恐ろしいと言いたい所だった。

「な、何でＳＰ？！」

優喜は少し遅れたリアクション。

「説明してあげてよ。」

「我らは秘密組織『ブラックガーデン』の頭領、富本 悟みやもとさとる様の子である富本穂様の護衛だ。何か質問はあるか。」

大有りですよ！――！

「大体ブラックガーデンって何ですか！？何の秘密組織なんですか？」

優喜は自分が何を言つているか正直分からなくなってきた。

「スパイだよ。芸能もあるけど、その他にもライバル会社の情報とかそんなのを集めてる。」

「・・・。」

優喜の脳裏に嫌な予感が走った。
恐る恐る訊ねる。

「オレに・・・何をしろと？」

やつらがと穂はその質問を待つていたかのよつて、こざまつした。

「よくぞ聞いてくれました。」

「何だよ・・・。」

「優喜君、君には」

「聞きたくない。」

だが縛られていて耳を塞げない。

「我が秘密組織『ブラックガーデン』に入つてもうう。よつて・・・」

やめる・・・それ以上言つな・・・。

「君に我が組織の仕事を手伝つてもうう。」

優喜は皿つきを変え穂を睨み、

「犯罪は手伝いません。」

そつ、相手の情報を許可無く盗む事は犯罪に等しい。
真面目すぎる彼には当然の選択だつた。

だが穂は一向に表情を変えず、
往生際が悪いよつて言った。

「犯罪とは人聞きが悪いなあ。ライバルを調べ上げるのは当然の事だろ？」

優喜はぎりつと歯を食い縛つた。

「もし、手伝ってくれないのなら・・・君の大事な人達にまで危害が及ぶよ？」

「そんな！卑怯ですよ！――」

「卑怯も何も、君が手伝ってくれれば済む話だよ？」

周りを囲んでたＳＰの二人がファイルを何冊か持ってきた。

優喜はぎよつとした。

そのファイルは、優喜の両親、姉、妹、そして友人達のデータが保存されたものだった。

「さて、どうする？君が手伝えばこの人達に危険なマネはしないよ。

「

冷静で冷酷な穂に対し、

優喜は汗を流すだけだった。

流石にそう言わると、

いくら優喜でも抵抗できない。

「・・・わかりましたよ。」「いい子。」

穂はまたにつっこり笑つた。

入団手続き

穂は優喜の前に契約書を用意した。

まずはこの書類。

会員NO. 7842536

名前：桜野 優喜

フリガナ：サクラノ ユウキ

年齢：17歳 高校一年生

性別：男 誕生日：5月5日

血液型：A型

住所：市 番地 丁目

特技：ゲーム 趣味：読書

苦手：暗い所

頭は結構よく、学年で5位。

運動神経は抜群。

現在一人暮らし。

ここに「ブラックガーデン」に
入団する事を証します。

責任者印

「 も、」 トトサインして。

「 ・・・はい。」

「 その次はこれを読んでね。」

契約条件

1・「ブラックガーデン」とは
秘密組織であるために、
外部にこの情報を漏らしてはならない。

2・団員は頭領に従い、頭領と頭領の身内に
逆らってはならない。

3・『えられた仕事は無理が無い限りやる事。

4・特別団員以外は恋愛を避けること。
(仕事の邪魔になるため)

5・団員は何でも出来るようになければならない。

etc . . .

「質問はあるかい?」

「沢山あります。」

「時間をかけてゆっくり話していく。まず、条件に對しては?」

「そうですね・・・。」

優喜はまた契約条件を見つめた。

「俺は特別団員に入るんですか?」

「ゲストみたいなものだからね。君は特別団員だよ。」

特別団員だとしたらもう少し優遇な扱いしてくれてもいいのではと
優喜は言おうとしたが、やめた。

「他に質問は?」

「団員は何でもって・・・。」

「ああ、家事的なものだよ。」

言つ終える前に答えてしまつた。

「他は?」

「・・・もう今日は疲れたので、じっくり聞くのはまた次の機会で
いいですか?」

「ああ、いいよ。家まで車で送りせるよ。お休み。」

「・・・お休みなさい。」

夢だと思いしたい

「・・・変な夢を見たな。」

目覚めが悪い朝。

変な夢を見たせいかもしねれない。

学校に行つて忘れよう・・・。

部屋を出た時、現実を叩きつけられた。

「おはよー。」

食卓には夢・・・いや、昨日見た男が笑顔で座っていた。
どうやら夢だと思わせてくれないようだ。

「どうして貴方がここにいるんですか!」

「やつぱり一人暮らしとなると部屋も狭いんだねえ。」

男は俺の話を無視し、部屋を歩き回った。

「・・・質素な部屋だね。」

「放つといで下さい。」

イライラしながら朝飯を作る。

「何作つてゐの?」

「・・・。」

「ん、家族写真?」

「勝手に見ないで下さい、富本さん。」

段々腹が立つてきた。

「穂でいこよ。可愛いじやん、小わい頃。」
何を言つてゐんだこの男は。

「穂さん、もう一度訊きます。何で俺の家にいるんですか。」

相変わらず部屋の物を見物しながら穂さんは言つた。

「決まつてゐだろ？新入団員を調査しに来たんだよ。」

「俺の事もつじろいろ知つてゐんじやないんですか？」

出来た朝ご飯を食卓に置く。

無難に白米、味噌汁、焼き魚だ。

「勘違いしないでくれ。ある程度のことは解つてるけれど、日常生活を監視なんてできないだろ？そんなストーカーみたいな事。」

「普通にやつてねうですけどね。」

「言つじやない。」

この人の相手は他の誰よりも疲れる。
それだけは断言できる。

「あの後、ご飯は食べた？」

「おかげ様であの後の記憶はすつきり消えてますよ。」

穂さんはあははと笑う。

挑発しているのかとまたイラッとしてしまつた。

本当にあの後の事は覚えていない。

おそらく食事も風呂も入ったのだらう。

昨日の残り物らしきおかずが冷蔵庫に入つていたし、風呂のタオルはまだ濡れていた。

「これから学校？」

「当然です。」

「 一々変な事を訊かれると本当に変質者と思つてしまひ。

「 今日課外授業とか言つて学校に乗り込んでじゃ おつかな。

彼は愉しそうに笑つてゐるが、

俺はちつとも愉しくない。

学校に来たらめちゃくちゃになつたつだ。

いい対応の仕方は「」うだらひ。

「 やめて下さい。」

そう言つとまた穂さんは大笑いした。

笑い事ではない。

真面目にやめて欲しい。

「 もしも本当に来たらどうする?」

笑いながら言ひ。

「 仮病で早退します。」

「 君らしいね。」

本当に愉しそうだ。

本当に来ない事を祈るひ・・・。

「はよー。」

大介はいつも通り少しへらへらした挨拶をする。

俺は昨日の事で疲れて、声も満足に出せない。そのため挨拶する気にもなれず、大介を一瞬見ただけで自分の席へ向かった。あまり重くない鞄を机の横にかけ、そのまま机に突っ伏した。

「どうした？？？顔色も悪いな。風邪か？」

「・・・多分な・・・。」

大介はこういうときだけは優しい。本当に。

血色の悪い俺を見て、ポケットから何かを取り出した。

キヤラメルだつた。

「甘いもんは疲れた時にいいんだぞ。」

「・・・俺、甘党じやない。」

「いいから、ちょっとした時に食つとけ。んじゃ、席戻るから。」

「・・・おひ。」

キーンコーンカーンコーン・・・

「ホームルームを始めるぞー。席に着いてない奴早く着けー。」

担任の水嶋先生、通称ずつしーのでかい声がいつもより小さく聞こえたのは、俺が疲れていて睡魔に負けそうになつていたからだ。

この後、一々四時限目までまともに授業を受けられなかつたのは言つまでも無い。

昼休みは本当に天国のようだった。

飯を食つた後は、保健室で休ませてもらい5時限目の途中から授業

にでた。

おかげで午後の授業を受ける体力は回復したようだ。

五時限目は何故か校長が来ていた。

噂によるところから課外授業らしい。

滅多に無いことなので、何となく楽しみにしていた。

だが『課外授業』と言つた言葉で思い出してしまった。

『今日課外授業とか言つて学校に乗り込んだじゃおうかな。』

朝のあの人と言葉だ。

来る可能性は十分有り得る。

そうわかつていても、来ないで欲しいと思つ一方だった。

朝「即早退します」と言つてしまつたが、

よくよく考えると彼・・・いや、彼女といった方が良いか。
アンジュが折角来てくれたということでクラス全員から大ブーイングを受けるに違いない。

昼休み早退しておけば……

後悔先に立たずと言つのは本当だな……。

でもまあ、まだ来るのは聞いていないので課外授業の詳細を聞こつて

「芸能界で活躍している人気女優、アンジュさんがいらっしゃつて
います。」

そう思つた直後ですか。
これはキツイ……。

体力というより、精神力の限界である。

とりあえずは知らないフリをしておこう。

どうせ向こうも俺に構ってる暇などないだろう。

うちのクラスは大半が男子なのだから・・・。

それが不幸中の幸いだ。

やがて彼女が教室の中に入つて來た。

ピンクのフリル付きとラメ入りのワンピースという格好だつた。

髪型は横でポニー テールをしている。

彼女の格好にクラスの男子は興奮気味だ。

少人数の女子は、彼氏がいれば怒り、嫉妬していた。

だが、女子の殆どがミーハーなため女子の視線もアンジューの方に向いていた。

「こんにちわ～。今日はね、芸能界について色々教えようと思つて、校長先生にお願いして来させていただきました。」

にこにこ笑顔と甘い女性らしい声で生徒を魅了させてしまった。（

どこから出してるんだ）

ドアからは多数の別のクラスの男子がアンジューを見よつと押し合つて見ていく。

「うふ。皆さん存知の通り私はモデル、女優などをやつています。

」

何がうふ、だ。俺は溜め息を吐いた。

女の毛皮を被つた獣だとも知らずに、クラスメイト達はただただアンジューにでれつでれなのだ。

「じゃあ～、早速だけど皆さんにクイズをするから～当てて頂戴ねえ。」

とまたにつこり。

「モデルってねえ、雑誌の専属モデルっていう言葉をよく聞くけど、実際にモデル個人がデザイナーとか出版社と契約することは全く無い。さて、何故でしょう？ そこの君、答えてくれる？」
クラスの生徒も廊下にいる生徒も俺の方に視線を向ける。

「このタイミングで指名するなよ！ ！」

よく見れば男子生徒の視線は憎しみと嫉妬が籠つていた。あの大介さえも俺を横目で睨む。

・・・ 答えるしかないだろ？

「全ではマネージメント会社を通しての契約となるからです。」

すると彼女はまたにつこり笑い、

「ふふ。正解よ。頭良いのね。」

俺は苦笑した。俺が答え終えるとすぐさまクラスメイト達の視線はアンジューの方へ戻った。

仕方なく授業が終わるまで大人しく待つことにした。だが、それまでにクラスの男子を当ててもしも違つたら俺に答えさせてくる。

そのため、男子生徒からは喧嘩を売るような目で見られた。ブレイブの嵐も巻き起こつた。

その度にアンジューは嬉しそうに笑うのだ。

どこまで俺を陥れるつもりなのかは知らないが、俺は無視しちゃうを得なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7119x/>

ブラック*ガーデン

2011年11月10日19時40分発行